特別
へ12
1077
46

早稻田大學圖書

利
1077
4546

1077
〆6

橋姫

十六歳　秋任右近中将任宰相

宇治八宮女子有二人 姉ハ総角巻ニ卒 妹ハ中君ト云

母君卒去事

京宮焼失之後住宇治給事

但以上事前年以前の事とみゆ

宇治阿闍梨参冷泉院語八宮
行を語事

宰相中将従此前聞給事

薫中納言八座に任する事なし秋
冬の間にあるへし
冷泉院 付 阿闍梨送御消息於字治
文給事
薫宰相中将来字治
習法文事
十七巻
十八巻
宰相中将字治八宮に始て世流する
経り三とせのうちよ秋のすゑつかた薫
君来字治事 去年かりの事也
薫中将来字治語事
八宮の姫君達合奏音事
漢宿直人垣間見事
招月事 以琵琶撥
見人条老人事 弁老人
老人物語柏木末期旨事
暁帰給事
明日奉文於字治事

右近将監為御使道傳布施物事
八丈月寺出経足
薫中納言白共後々許諾尸宇治姫文
又抜事
十月廿六日比薫中納言参宇治事
令物音給事
戸封中納言経事
宇治交契令
中納言琵琶
八丈出給事
暁方召弁君間先人日物語残事
其夜来門請文入袋事

帰京参三条宮給事

花

宇治巻

或抄云此物語ハ相並りの後也

浮橋まて宇治巻と云ハ式部かき

なかりしとおもへり式部か娘ハ宇治

十帖ハ娘の大弐三位か作りて源氏物語

ニそへらしぬしとも書きしハ明獻

の史記をかきけりとぞれ子明国の

かきつきたるに於ゐうたかへし

大弐三位ハ右衛門佐宣孝ノ女
賢子後一条院乳母叙三位之

弄
宇治十帖をハ大弐三位書たりといふ義
あれと難用れハ京或人の息女之花鳥ニ見ゆ
紅梅竹川ニ宇治一二の巻混乱せり
文体ハ其時代のうはらよまりせて云々

秘
宇治十帖ハ娘の大弐三位ヵ筆と云
説あり師説不用之古今ハ文体あり
かハれとも紫式部ヵ筆にあり次也い同
義ニハ此也はまさしく文体と云家
之時代年七十年来の筆とかける有

小さう間ニは人の朝はしいみとしさ氏
してかはせ給ひし末の代になる跡を見ん
せさるましき或人の筆なるへし

義
此物語ハ法ニ作史記ニよれり先桐壺
より幻まての四十一帖の巻をハ本紀
十二巻ニ比し此宇治十帖をハ世家卅
巻ニなそらへ匂並十帖をハ列伝七十
巻ニ擬セて云かの巻しりて添れ紙
さる筆作りとしし

又云これ此法荘子の寓言を摸すといふこと
荘子に内篇外篇雑篇あり内篇ハ鯤
の根なきを行すあきらかに桐童なり
白文まてのせ七段に志心あり外篇を
此の事遊をあらはし宇治十帖と准す雑
篇ハ事理をましへあらはし並の十帖を
摸せんとして文体ありあらへき
事功論なり

秘
宇治と号する事菟道稚子の事を

花
花鳥にひかりむ色奥ハあり
応神天皇より八宇佐八幡大
菩薩とたゝへまつれる御子これなる
大鷦鷯のみことゝ申す弟菟道稚子と
申せり又みやこをうぢのごとくやしなれ
もとよりたりしかるに東宮にさたま
らせ給ひてのちのち後なとかくれ給ひ
ふまれし八東宮位をはゆ世を遁れさといひて
わきこのみをときゝえてまつりて八位を

はん太さゝきのわうしこそやく位にはつき給
ふへしとおほしめしとかれハ此のみなり
こもうちわかの子を先位になりしめ
されハさて太子にはたてまいらせ給ひ
けあいりてハ又皇位をハさうへすゝんと
てされハ難波にわたりおはしけり又
うちわかの子も宇治にこもり給ひけり
それのかたに国しのあまもろとも河をさ
もちて宇治にまてまいれハはれは

天皇にあらは難波へまてまいらせと仰
されハあちこちまてまいるかたに何も
くち損しされハお魚ともその御肴を
なんぬかりもうかくて三年を過き給ふ
難波に宇治わう子のたまハく我こそあれ
王の位をたえすして久しくもいきて
天下をわつらハさんやとてわかせしたなか
御身をうしなひ給ひけれハ太さゝきの
みこさき給ひて難波よりいそきたりし

ありていつそわきをまつくされりは
ころもへこそれいさかひ給へとも
稚みこひとへにかたくし給ひけれは
うちわたくしにさそへり給ておさぬ
給てや給はく位ハ天命之かなふおる
事之いふてたてまつらんとて又稚み
みこてはかれらせ給ひけりあはれく
大さゝきのみこ素服してなけき給て
宇治山にはふりまゐらせき給ひて

そのゝちなん大さゝきのみことはみくらゐに
つかせ給ひよはなれこれを仁徳天皇と
申せ宇治といふ名ハ山城国の郡の名
なり爰にて里をも宇治といへり是ハ
昔より此名有は神功后の御世よりの
詞にも田上るもとく宇治より年毎にせ
よありさ山すみ給人ありしかあるく
宇治わき子とハ申給ふ今物語乃
宇治乃しるしそくれ申しハこそりつれ

乃みこ也第八の宮之御母ハ在丸大臣乃
女とみえたり御わたりとハ冷泉院
第十の御子之東宮より申しし時朱雀乃母
后大きさきと申侍りましこさい
后もろ流むまこの東宮と冷泉院よ
ひきさまれ給へ家をかいまれまり
見しめしてせめてれなりにれ
八宮をとりさてもそかしつきさ面り
多りと六条院の流いさもひよおもれ給て

二条中しきるになりてされわり冷泉院
ゝも此八宮御中それしもせしかせ給
てかれと中しけるに宇治に内と
をとり給つろみ宮れ御家之居けるに
かハ宇治とハ所みらしおもむ山里乃名
有るにより八給へまは宇治のかた
乃名といなりけ給りや昔からゝまる
子ハさのゝみよ侍とやりて宇治り
こもり給つり此八宮ハ御弟りし東宮と

こゝにしく宇治にかゝれ侍りとみゆる事
あれともわかれ成にけむすて世代
宇治山よりのまゝ侍るそれおもしおもはゞ
さうら色ともに兄弟のあはさは事
なき後にかきしに宇治の巻とは侍
侍るを

私義
此物語桐壺帝を漢高祖よ卒して
さう事は代りう後につきそて弘徽殿の
大后と呂后によそへたり又高祖の
八子ありし八宮をかけきとも無代
そのあり桐壺のみとかくれ給ひて
後によう[ず]雲の慶戚夫人のやまん
め代座りよ八なしあり是も無代
又史記ノ世家と八家ノ世ニスト立之代ヲ云
者ハ皆列傳ニ入二代三代と相續スル八ニ入ル
者世家ニアリ此宇治十帖を八世家ニ比ス
八宮ノ総角大君中君浮舟等の事を
記たり

橋姫

花 以歌為巻名

河 橋姫の心をくみて高せさす棹の
雫に袖そぬれぬる

一名優婆塞ニ言文らしく拙くかきこゆ
山乃ふかき仏とにのり

花 橋姫を弄の詞とて巻の名とせり
薫中将十六歳の時より十八歳まて
の事也此巻ハ匂兵部卿紅梅
竹川等の巻と同時の事也

弁

此巻ハ紅梅の巻よりさきの事なり
ありみゆ
此巻ニ薫宰相中将とあり 十九さい
薫の宇治へ心をよせ給ふる事十三
年計とあり 竹河の末ニ宇治へ来
給事 又十月ニ来る事あり 薫十
九才より廿一才也 名まても見 匂宮ニ 薫
十六より十八まての事とあり 不審也
系橋姫一巻ひめ清ニ関ちしなしひめの
字濁てよむ 一段すむへきとされ

義
あしびめ ひめ字濁 ひめ文字清之

弁
此巻ハ姫ハ八文也 幼少の時より事を
みきりニ云々
此文ハ事を以前の事として書ハあるみ
して八文の事と書しし光人云之
其ゆへハりとまゐりみて如此事書く
薫乃年とまて[illegible]とまるすはつ云く
匂宮ニ 三十[illegible]乃異ハ何り 薫十九歳より

廿一歳の冬まて九年なるかの年
の次花鳥りしをきて一九清閑より
なり
（後成恩寺殿）花鳥余情ハ源氏物語年立にて補継
をあつ件抄ニハ年齢の相違みえ
巻之名ハ以歌号之

そのかみ世みかすまへらまし頃なみや
おりしきわ
は 宇治宮 桐壺帝第八の御子也 母大臣女
これ此ハ今上冷泉の時也 紅梅巻之姫詞 号八宮 又優婆塞宮
一段同時ノ也
薫中将昇進以下まて号あれへし
花 ここにしハいつまても時ふとさしめて見ゆ
へき事それ此巻より薫中将の宇治に
まうてあへる事をいひて宰相中将と

かきつり又紅梅のおとゝ故大納言
とのせつりたまひて見つる時ハ葉乃
十六才の時なるへしいまさかりとみえし女
の宮御之くうたりなてりはの手いはん
うれはしとハいよいよ御手つかまつりしを
ハぬとハ柏木の御門の御子の教り
うきへら是なりぬと云々

抄

あはれ文ハ八文之此文乃手おもしろき
かくさはいはすハ紐ゟれ時ゟり九手代

うきり東文ふして立きまへるへき手にけりとゝ
それはしいふハ南代今上乃御ことをさ
さみすなるへし

箋

それは代南時よりとりあそしふたてはよ
又後言れ時の手まはそしみなし是也とて

毋

きこなりし御人ましてなし

花

是ゟりハ先りもの手とい之八文南西は
たた大かれの女とみえり

抄

大臣乃北方あれ女御とみえたり

すちとれ家へハさ流たかしなと
花 ともあしとすらんこさと八一流とよひ
ありてこそお續あるこの家のゟの人
うしれ流おかしまて一切のましと也
松 八宮ハとゐらすゑこさ也 弁
時うつりて世中よそしさゝかあられ給まう
花 六条院とうちまし丸家も半挫くし
しく成しるをといはさハ半の道
たゝおもひとハ抱のこハしおはしまさき

松 事成りの上にてすまつりまねとおり世
冷泉院御文よ立まふを弘徽殿大后
八けハ八宮をとりたてんとし給へりしか
成就せさる也さてゆくとハいかりあり
沙汰あらりせはおもへしこと
弁 是し奉文まなかの事ゆへこ
抱らしたるしこそ心くしまて
はかりし給こなりのはらくしくん
こうをさしてはかりまいておたるまた

此のさしむすめの大臣のはむすめあなりける

筝　八丈のむすめハ大臣の女之讃をもみれ

おやさられおかしとこそさらし

松　八丈東宮のおち語りて当方と云君あり

〔しと又年ともハおおかしきなること〕

おしらんちこともうれと文想とれく

筝　八丈乃子供かしもおかれとて

女君れいとらはらしきすりむまれ語わ

松　あまをまれの君之　なり大方でいよ

たあしさ海までゑいうすは去語ひなりし

花　おあしさ海もハ此さいも又姫君のまれ

ま人ぶ年とそうり此君は白拍子卿実に

むろつき語をまち君たちとゆりしけ

語へりと

いとにいそまつひくうせのひぬ

松　母君へ

おりかえにつきまく

筝　世るの神せ　八丈のれんれ

見えてかくありかれなる人

秘 八文の書とも申にて候

かやうとお御身なく

拾 上らうの事と限られしと申ハそのかし

の事也

秘 上臈の事之限なきとハ天子をいふ

かきりあるとハ親王なと申をいふ

ろうしくハえせられし女房達の

事をいふ也

見ゆける人なくて

箋 姫君たちのかし

をのことよすけまさりまふ

先と姫君たちのなとを云ふ

のちよむまいれまし君とは

秘 中の君は次代らみなまたらせ給ふ家

と云り

いてやなりかしこく

花 いてやと云詞古今集にいてゝあれと

人なしなそ そこ人つものこれより念を
ありそこハさてあるといふやうなる詞也
いそへハし いそて我れし さてりとふ
ことなき

抄

かゝりける海まて

抄

少弐乃遺言也 はけ光氏らく養育
のよへしこと
光しおもて この光氏しも
少弐の遺言を光しむく世中光氏ハ

後のはかりしきふとこそれなり
母君の世語へかハはけまとこもいひ
ともし玉のあかれしなるも
ひめ君は宮のせうとなり

抄

あ玉君し 弄 義 なかしらしまする
かさこ
はかりし御人とふれまち

花

光とはなしと姫君のまし

弄

中君なるへし 又文のはかりくおもひ

まふし

秘 中君なりしきりくなるを

はさしくよきさひて

秘 沢し

まろ君の浅めのと

同 女子をもまろ君よい年わかき姫

めのとなるも人許をえらひあるに

まかせてときさまふし

かたにつきたる心あさし

弁 下らうに付たる心あさし

下臈より付たる心あさくみ境界の格れ

有て君こそみれ成人ともみえさりき

私見八中文のゆし旅さそれとは

小方にし旅人に御旅に旅人ともえ

外れたることもよそれみしたるを

同 巻(ハリハム)肩 有(ハリム)カヘリミル(ハフク)

ちくさしく

いろりおりし頭さ文れいけむ

弁 八文れ の文乃字

むつくしき人も

義 棟しや家之主とする人あれなり
扨の棟梁をとりなとする人のあれ
をいふ

いろいろも縁とれ字しぬみ

秘 妙方ともろすみ見し書之

義 父とも縁とも書人の書の字の心よ
かくそわりし經不及川字ねさ

ちぶりのれかさりりりと

何 持佛荘厳之

義 光より優婆塞文九にかさいき

うるわしとおもり

義 姫君之

こころの世にふれし

妙方の中之

まいの人のさ法の字の心なく

説 男女の道乃月をいふ

なしかさしもよるしなの

秘
夫婦のちきり疎謀之
あつきれは
義
縁ふかきは之
秘
よろつの事もありと之一紙縁ともなと
人ハわか事れ侍る之
まつきなれ交わらんとものつもてなさるて
とふらふ多よ男のうらりすしまて
たかすらハいよし地さひしくえくろ
しらへし世あて出おそハしぬ

あらんなりともわかしなき人し
世の人のりなたけし嬢
年
又出ともすまい世拾へりしあとしよ
あんつさたなふし
何
篇 宴 玉篇 梁大同九年三月廿八日黄
門侍郎兼大学博士顧野王撰字
廿万九千一百七字三十巻五百六部
玉篇なとの極み字の篇をとらへて ささ
つまてわかゆり事よりするさ

しめ君ハねかひにて
大君之　何事もやうみこさあり
また君ハいとうはくしう
中君之いつまでとうりしくなりて
池のみるともみそうらかりして
みのうるしさえはらいまれなる之又鴛鴦ハ
鴛雄なるれぬ鳥之一つまぬまでハいまの一羽
もえぬるしいかつ杜子美か詩にも
鴛鴦不独宿と作まわりしその

文学よまれ候てみるのつひあ
まゐとうしやまりしくもあなた
独すみなる鳥不独とは感すなる之
かくあるを
打捨てはいさりにしあるれなめ世をきえん
此方ハ非君ならぬ事をよみさ海之利
さてりれこの世とはつまをゆりかやの
このことハかりの子をさらうたか物二
さいしやうめうしくいてささるかなれ

こうされはく
かひの中に命こもらりけるは
未たむまれもせて色もさらなん
無集語りにてあて文字すくなになり
りしかかりのこ見せよとて其状を
文字しきすう候ぬ形ひかれとの類ぞ
とあわ

秘 表らはか
かひの中に命こもし出来月をと
打すそくとぞりかりのこかめすり

よせくらあり心ハ仮の世之大方に定なき
世中よかやうれはまこりあらハ不定成
ら人の不定とらあるへく

昇
かりの子とりれて以て鴨のこにしよせ
て文れ体子乃事をとる語へ古来ハ
仮の世とらあり

義
かりの世せられハしもて之をと候ハ
以て叙の三陽り南時ハらむまりしさ之
まうしちも人ありこれ古来の文字と

もんとハうかはさられ子鴨の子之
かくちいさきよけみたりしまれ
秘　八文をいふ
な紙しのうへにかはかな　筆　姫君とかしつき
まふ心ちへよ本哀をもこさかなとや
秘　うりみもらちけるハまうしまさは
執みさり
すりたハかきてけさるり
河　硯ハ文殊の化眼也比は眼石といふの

故をとりて硯石とハいふと河比なて
よ物紙かきらす之花家し流日記も
硯面よ不書とはあり
見ふる色面よ物もかきさりしさ輪　花家
のやりしも洗はさりけり
見河海　又たりかつのいさあまや
弄　秘　河海に見てさり　川安　見ふ石なてふし
若みあわりの略し
太君　いふてもくすきらけるあそし出よりてとふ風暖花安

秘
あま君の方へ少将よとゐれかくハ何らして
かハ人となりつれそと之
れうさ身をもうらむへし
よう詠ともれなりハ
秘
其子此歌而を評して其り
義
かやうよきりくしたるハられ身まてハ
なけきもしも之
またたひされえて
義
身をとかめぬ詞也

たまけよ久しきも
義
中君のさ海之久しきさら妙や青ふく
詠之
中君
なをしくしらを打ちすう君まつく義れすあそ必ず
秘
中君の方八文ましぬさて八すりよなる
へしとく
同右大臣
古中将文の少将を世経てなちいされ
京ならとりして三条右大臣殿より
候ぬれいかり沽いくしみもすくしてハ

はるのよかはりたるにしたまふしかりけれハ
かの少将の御弟九条殿にてえ給ひん
しみんたかりきつるをおつはされしたや
うつかうしをゑへしさり宰相にいつおもと
きん左近兵衛督（帥尹）の君御使にて御しるき
はそれゆゑとてそくしをんなにはらさて
んつきれしやおとりかくもの文に
なんもつりなりみまうらせ時に文すゑ
ありけり

みさん人のすりみたらうへさせ
しいふとかくて宰相の中将かくさ
文の御返し

すりもとみて宮の御はてしきまとひ
そへくをなりここそえきけ
鳥の子はまさにいふかうそらにいね
かひのみゆらむ宇すかりなりけり

於浅茅物名

はるになくしてみて

松

八文の法化は岩さらの衣裳なとを

こゝろしかられ文字ぬ人でなれ心
もろしとなれく
心ぞうらいくおほきらん
秘
筆法をうけてまいり候
綎法をさてはりけ海ひて

應神天皇十五年甲辰八月百濟阿
直岐ミし能讀經典即太子菟道
稚郎子師トス天皇問曰如勝汝
博士亦有耶對曰有王仁者是秀
也時ニ遣ス荒田別於百濟ニ徵ニ王仁ヲ
六年乙巳王仁來太子師之習諸典籍
欽明天皇十三年百濟獻經論

はりがもしまよ
何
唱歌　唱歌の秘事師說あるべし
秘
流おとをしへのまゝて唱歌しおぼす
ちみともとそゝ女御みてきこゝをとれ
ゑまいて
秘
相喬は門みて母女御みてをやくもれ

總く何事も世事のあわさ海境も
よくもまり總ハさ扱之
扎笔ハ八家の世事をいふ
世けよきみはくれ他をさそて
世間のことすぢひとハ分りてより
總ハぬとえ
たわらたしの世そりがん
秘 八文の母ハ太氏の女之その太氏より
はさいりうをいへり 异

ことはさくれ也れしとも
秘 雅楽寮の楽人ころのことは書沃
いへり 异 義
雅楽寮職員令雅楽寮頭一人乃至
歌師四人
儛師四人笛師二人唐国楽師十二人
高麗楽師四人百済楽師四人新羅楽
師四人腰鼓師二人以下略之
源氏のおしれれおとりうた八文とえ

ききちしと

こゝにをしめて　八宮は桐壺のみかと

うきはりし御子ありなしとても

よはしめり深すくれつく事は

天下に見所まく見えされとのち

後をされよかくハ流されさみおりく

ことゆりこ

秘

八宮と春宮と申し弘徽殿は大后の

おもひまし給へるりし

大きはれのよにきぬみ

弁

八宮は春宮と弘徽殿は大后

まし給へし実母とはしれ

あさきゆめの流なりひをは

河

あさきゆめは六条院の御事也

秘

源氏をさしいふ

いよくかの流れきくみ

秘

源氏の御親わりになりて世と也

かくふひしまた

此方ら世語くらりはの事之
すしまふらやなけふけり
八文の里の此所之
ら川ろいすみのえら前のえりこさも
なりりられハ
京中にはおよそおも語いねと之
うらとい所りらあ山里も語み
事なり
宇治の山里之事より八文ら浅は

ありく
弄
文の山庄にれも八文の浅之
あ語の事りいちく
網代ハ近江国田上川と此所とに有
又田上川まてあまりのか奥ぬ守
治川まてに陸もに此中或拘抑り
足保と云之網代事延喜式にありと云
松
野山のすこてもきりの人
さしてそ隔かたなる所あり語る山を

いふ迄まておもしろし　新

抄

むかしの人ハ皆之

み人と寓と煙となりけりと休に一様なきをきん

続

ありめれまことといふ事をむかしありけれ

新

時よおもりてありまろみ治を春

いけるかひありて

同　大和物語

雲井まてらそ人の沢ハ有明の月あはれ

きてはみそいに童のひとさ

抄

草子地之　川ぶまし

いかし山かくなきまで

同

山里の様

続

月よみのあみきき海せおもしろきそれ

山かきありてきよしきくに

私は川ぶ不知

見孫の朝霧く関ありそて

同

居の家よの朝霧をなれすのに

おもひつきせぬ世中のうき

此宇治山の秘事かきらず

秘

花

喜撰ハ世をのかれて以前の来

古今集喜撰法師哥

我庵は都のたつみしかそすむ

世をうち山と人はいふなり

或書云喜撰隠居宇治山持寮院今に

松葉得仙道云々

後冷泉院御宇永承七年に頼通公

宇治の別業を寺になして

平等院となつく後阿闍利米口訣

よせて慈覚智證両門徒を補せし

めらる

おほやきことにもいてはへれに

公請をも辞して隠居の人也

うしろまかひきれ

秘

八文字とよりも覚海まいり

つきてしておもひ給法文の深字成

事なとところかせさせまつゝし哥

心ありはちすのうへり

河

極楽國土有七寶池八功德水充滿其
中池底純以金沙布地乃至池中蓮
華大如車輪　阿弥陀経之

秘
花
有七宝池八功德水
川方

秋
ふかり八露れいのちもあかりに
くもりすれ八人乃むねもちきれ八　寂方

日
一ひもなむあみた仏といふ人の蓮の
うへにのほらぬハなし　空也上人

色そてあおゝろしまふ
八文のあさきよみのまふ
きせいかん人ゟもすゝしく

秘
前ハ大やけ事にも出つ人ともと云心
ハ外さるなるに清キハさもさかえなり
ゐさし俗人ハ東するへし　尋

まいのさる人とさ

秘
聖教なりと心
八文のいとかしこくみいけるれ

河
内教　内典也
あきられ冷泉院へ御翫之
いまさかりハうち捨られや
秘
冷泉院の御翫之
そこらしつまとう
河
浄名居士云身在家心出家云々依般若て
戒行を持する人也四ノ弟子ノ中
優婆塞是也唐土ニても龐居士なといひ
て多此類あり凡聲聞ハ必令出家

十地以上菩薩若無其器也
花
東坡山谷なとも男法ニ而有髪僧在
家僧なとも詩ニてもはへまり
宰相中将も流前みさまうひて
花
宰相中将ハ薫大将の事也
秘
薫之十九歳の年なるへし　紅梅巻ニ
時方之
弄
紅梅巻ハ薫中納言之此巻ハ宰相の也
われしそ世中と

秘
菩提心ハ物事の菩提をもさとり知
知り道心のすゝむる事
みちびきて学ぶ也
秘
俗なりし法ともかり事誠尽てくりかへし
以法へ家へ
出家の名をしハ
秘
聖の流派事之弁 八文字の家志の事
作りそで
作りませ

されハ物乃音め川ゑ
物りぬれぬる聖なれどもりの
尋ねこめ世まで
いとおり浜く梅出ぬ申まで
花
かりさくハ堤遊之おもふハすれから
物おいそかこいハ古代つめし
こさむ之梅ふ乃安舞の菩薩の月成
いわ
私云三本かりさくれ綱なし

みこたちみ給ふ
冷泉院なり
ひとまれおもはすよそひいて
姫君たちの事也
なしのおとや　琴なとはさみ事なるも
しりしもとくまんなとハ
箋 八宮よりも御弟なれハ也 姫君たち我
ゆつり給へりしと仰らるゝ也
此院の君とハ十九はかりまて

秘 冷泉院の御みこ也 河
花 雅明親王ハ宇多天皇第十ノ御子也 御
母ハ京極御息所女也 御寺家ノ後ノ御子なるよ
りて延喜ノ御子となりまいらせまし
やうしいへり
朱雀院のみこたちなれ故六条院よ
秘 院の御遺言入道之時なれハ女めしとハ女三宮を
源よあつけ給ひしをいふなと也 箋
中将の君ハ中くらゐのおとこの子すまし給へる人

秘

茎の作より出来よりも此八文字はおすむき
作よみへ家之
うらくみて辛しこさ語り
問し阿闍梨の八文字の流辛文とらひ
語くとく
みしハ流しつくふて

阿

冷泉流の筆之流号の様に作もさるな
流のみとしありつまきハその作之

冷泉流

世話いふ作ハ山よみかよくとも八分を雲を焼やつか

秘

冷泉流の世話いよひおよ流作のすま
さうハ八文字は流うさくり庵ふてくるまふ
りとく弁義
此流はうひとされふさて

秘

ひしまにもおとつくおりて此流分とハ
別よ流使まてまいり世まてん弁
まちらつこひ
八文字の侃たまふへ

返八文字

語さしく作すむとハうけ筆しとも世を字治山よ宿と統き

河

我庵は都のたつみしかそすむ世を
うし山と人はいふなり

秘

我身一すちに世をうきとてなり
あらすし喜撰か心をもち感歎の
心のあらはれむすひ句をもの名なり
らみ世をすり彼なる光か雲の今さら
はすみしともお都き並へし義
ひしりぬるとはひきして

秘

此は是にて述懐のあるやうにあ里

御らんしてあるへし

鼻

世に述懐あるやうに冷泉院はきこし
めしけるに八月早下の御返事被遣
此歌あり　大和物語　又新古今

中ねの君の歌めうきんかけるよ
其の詠しさなと河関村松八条より

キウ　モミ

清文なるの歌えんまありしさ
申しさゆへ

業のあまりよかりしきぬし
世中をうらむさまかなんと
数ならぬ身ハ却てひくとく
いとあはれにこそきこゆ
八文のはあはれきゆとやよおもひてこそ
又世中をかりそめ事と
松 八文の結因縁なくしては道心ハおこらん
さかりのことこそ
何事もあらぬ心ハおもしろし

花 あらぬ事ハあらしと八万事よそなる
事なくおもひさうろ也
さてよハさぐこそや
松 八文の時分ハさかへき事も仏のすゝめ給
風なる世をうきまてもかくいとひ
ぬまじとこそ
ものしくもおもてるとあらぬへかある
古川なるなる八月はに叶ひしもしも
ものや鈴ものとわすりきれやらまて

仏法のふかき心まて入ぬところく
しくしあつてゐぬへうめるもいふや
あしきり来さしよまもろ有るく
弁
蓮の仏中とおあるる之
こきしかくみもり来みもかなかなとれ
あ心のあるへこき事ハおうけぬ事之
されハ仏をいりうしこき法の変えとみわ
八文ハ自然よ名やりよなりゆく事なり
身まてさへなるくしかりぬみをや

のりのこゑふもそハ
花
法友之
みいりうもまりて経
蓮の字治へたりなるる之
秘
蓮之

ひきりとなられら御心よハ来て向とこえ心こ海らぬ、
とらしおれくうむの趣して生家ハ奈下まさへ三
宿をぬ事多れ心残こあぬ多りなるといへ内え

法のひきうり
秘
字治のわたりれさ海之

仏法のふかさ心まて入ぬるとゝく
しくしあつてゐぬへうめるといふや
るしきり来さしよ土をとる所るく
弁
薫の御中とかあさるゝ
これしかくみもり来るもかすかなれとれ
その心のあるへき事ハ思ひかけぬ事也
されハ仏をいのりしき法の友ともあれ
八宮ハ自然よ名やうよなりゆく空なる
身まてさへあるくしかぬみるや

わりのこりふしそハ
花
法友也
み川のうきまうて経
秘
薫也
薫の宇治へたひ行る也
きたるしうりもあれよ
薫乃心さしおもひしりあわれな
ふさ給也
宿乃ひきうり
秘
宇治のわたりれさ給也

よなよな更けて宇治とさゝふ
河 宇治川の浪の枕に夢さめしは
橋姫のいや祢さうらん
奥入会は方同時方乞不一為沈方乞し
まこて吹きうひらり
桜 風ともいふて吹いて梅も以ふまゝり
拝借之
よれ子の女しく
桜 薫乃拝尊之

さりげりと覚さてそれ
弁 姫君のきゝハお仏堂のうちの障子代
覚さてさりげり之
されとさかゝく残たりひらきて
桜 薫乃打久しして忠心のうら之
あされえまんも
秘 浅之
私あされから似たぬす
あふしやうまうらそくあつれたき事山れ
河 優婆塞

花

優婆塞ハ梵語唐土ニ翻して近事
男といへり俗なから仏の戒を保つもの
人也舒明天皇の御宇に役公小
角年卅二にして家をはなれてかつらき
山に入て藤の皮を衣とし松の葉を
食として孔雀明王の咒をとなへて法を
よ仙術をえて鬼神をつかさとり
是を役優婆塞となつく山卧ノ行ハ
是よりそはしまりけりとなん

雁

うちそへつたふに山のしるへなりして
あれそたくしこゝにすみしあかしては
さらしなには行て

八宗の法文をときしらせ人のまよひさとし
ひしりといふ人さへあり

船

薫の心

まうしくの僧都僧正のさはく

宿徳

いむ事をまもりけり

何
受持梵戒ノ事 戒行と恵解とハ各
別の事也
けちえんやしくもくめでてこちなけ小
秘 無骨之
こちなけハ無骨之儀よなり屋りあさき
事とハふこゝろあるもいひなしゝ侍
るハ大なるけしに 何 設自帝何答況
彼仕優婆天仙弾指恥聖賢副心
悲 高野正学上人

新千載法花経かうしり
やりのくしゝさきうなるりのさま
ちらくなしとしハめし入くしくとゝ
いとあてみ心なしきゝさ海して
八文法文の経のさ海
あうきさ法さとわりみなを
八文の法ノ学のかとゝ云
られ人ハ抱の仏とえるみさされ
寿 うきのの人の事なるへしるも玄戒法よ

なへし　河海の善人不知什
秘　しれ人ハ先人之　花鳥義同し
花　よき人とハ先き人と云やうきより
りし方よりあるも書し備し給ひし
先き人ハ智恵ありて物の分秩をやく
河　さし給ふ之　河海説あやまれる之
河　天道無親唯與ハ善人
仏教ニも善性人悪性人あり　又孟子ニ
も性善悪といへり

きひしらうたかしまふ
秘　宗祇ニも　きひしく云まふ
此先人く色うしらり
董乃八文を信師此事
おふしよふらひ
冷泉流より枝しく消色を世あろし
三重りりまぬぬ
秘　董十九廿廿一ノ年之　花鳥年号ハあわ
董宇年ねまて三年ハり宗祇（高代の難）

みゆえに後中納言と名くなり

弁 私に同五条の新院別に領あり

秋乃すゑ川と云よみて中納言卿

秘 八月之四季よ七日川の九会卿之弁

中ね君久しく年へぬれと

薫の宇治へ久安無音之

有明の月九まさよみく

何 よひよ暁まて九月残之時といふと

云し 独寝只朝之時九月といへる花も

秋の末川へとあるハ九月下旬比の事なる

独因に花よハ十五日より後九月とをあ

といへり

定房卿続千羽従生十五日以後月

よハ残晨月（アリアケ）ニ云し

川乃こゑさなきハ私とるともえハて

花 いまの橋守のあはれなるへし

秘 宇治文ハ南村乃橋守の事なるへし

宇治橋ハ孝徳天皇大化元年丙午造

此橋之

みちもみえぬしげきの中を

秘 一説濁キ野中と云へ不用之義キ本中

とも読へし　異義

河 釈行説云しけきの中ともよむへきや

風のさそひよるくとおちみちる

木の葉の露とあり野の露なるハ木葉の

露のちりうるハ紅葉してや侍らん且ハ

宇治の通路山路本云しけきの中也但

此本とハ野中とかけるを本云　水原

筆にしけきの中あまりの入たるなる之

にあるハしけきを本と云詞あるへき及野中にも

かなへるなるへし乃ハ野中ハ森野

中の松桜なとしおもしろき

野中まてもしたるねへしけき本乃

う見桐壺巻の筆もつの本をとる

同筆之何モ今筆し義之不可用

花

推量しもの巻云かるしけき野へとまけ入

経之家紫しなともなひしめくし
宇治よりもぬのあらえき事ハ池文と外
みちもむつふ及ぶす
私河花両抄め此野中流よつさて
為本哉不用し但弄秘義為本ノ
中用し滋野中不用し不分明之
右此義と見へし

書
山おろしにたえぬ木葉の露よりもあやなくもろき我涙哉 小

花
俊成卿 弄

あらし吹峯のもみちの日にそへて
もろくなりゆくわか涙かな

秘
此源氏此前歌よりてよみ侍り
あやなくハあちきなくと云也俊成卿
花鳥よりひろわ

弄
あちきなきハ思之おこたる
峯のもみちとをけて

弄
家し乃峯の梢をとりあへ

秘
なすらへ乃由也

ぬしゝぬとおとろをも
河右
ぬしらぬ香こそにほへれ秋の野に
たかぬきかけし藤はかまそも
平
哥のこゝろ
そのおもむきもさしわかれぬ抽の香
こととは絃の音あはれにハ抽の香とハ盗
色ふかしと云し
まうしれしてうにしらへて
河
此黄鐘調ハ笛ハ黄鐘調を盤色風香

調之比色ノ黄鐘よハおしぬかえ盤色ハ風香
調之風香調ニ秘曲アリ楊真操
流泉木曲之仍以此両調子如先此色ノ
黄鐘調ハ笛ノ平調よおハ行なり
揚ア以貞敏ヲ調を定めらり風香調
合笛黄鐘調　返風香調　合越平調双調
黄鐘調　合笛平調　清調　合笛平調盤渉調
是之今世ニ此分返黄鐘調　笛ちゝ合調
双調　笛一越調　平調　笛盤渉調　木おわくりく

不及候　秘 河海よりてうり弁

けりのあとあそれは

秘 ちくなあみあそうひてきこゆる

とりぬ人めく

弁 きよりひあまくし

あくなんらりたりけれ

秘 このひ人のゆゑ

八月七日九会仏よ阿さるまれ弁はすり

あまる

なにの志る浪あは

秘 薫れ詞　弁 薫乃斟酌

私何が志る何の行りといふ

見よてきくかならちろそて

秘 こぬ人を

志りしやとめしらせて

秘 薫のなひ久しくあるを

流げをひかうこちの

秘 薫乃さ海とこの弁人れもへ承る

人きらぬ時ハ
秘 よめぬ人乃詞
うちまよひ給ひて
薫なり
あらきなれはおかしく
秘 薫乃ことはゝ
何かさのおまへは
秘 よの井人の詞
竹のすいかい

ほ
立架三間新草堂 石階松桂竹
編籬
とへよせさてまつまつわ
秘 此よめぬ人れ心ぬ人かれ姫君なから
とのうりなく見せさてまつる不忠乃
事也月ころあへき事也弃
すかれとみしくまれおけ
籬ぬなく挑おけたるあと〳〵しまさき
のうしろ上の方うしろさきあと〳〵し

ちりハ枝よりまさりぬるかれく

秘　芝大君之

扇にてまねきても月ハかへさじ川原

うりがわしく

河　使行天奥入日

月隠重山今擎扇喩之　止観

於　あふ事ハかたさの里の月乃雲がくれ

おかつきやハ人の恋しき

日　秋れ来の月をも君ハ雲かくれ思ハ

りみまハちつひしき

後漢職浣流時出拗流乃流談義あり

ゝ成みハ扇招月事語乃みえしき

きりたいつ里も無西人後月基長云

漢書ニハ扇月代まるみとハ事あ

里つゝ五音通するあし然ハまるそ

てなる　水原

杜詩云月生初学扇ノ細不成衣 注云

初ノ謂不成衣 言未甚ゝ圓也 細也

箋曰季義甫詞鐸月

成歌扇裁ニ作舞衣

事しきもてとあつ然

押てまはして似たんともすまふ理に画
きや扇と古来月に喩へらる事勿論之
されハ扇にて月にハまかせあれとも撥も月
まはるまし抑まし孫ハ扇にてもまさき
浜くらりかりと女の似よなりてもなく
之ゆきや次の詞にも入日紙のくれたち
しそこなきてあられ偏にまはりて似之
字にはあらされ
式詩注云月円似扇故云月扇

花
招月とハとりけ詩にも流れり入日紙
うくれ撥ともいふ事もあれハ月は扇あさ
以前似るへし
抄
中若之
もひとつはかりは人ハおとのかく人みかくさかて
入日紙のくれたちてそおわきれし
何
淮南子曰魯陽公与韓搆難戦酣日暮
援戈而撝之日為之反三舎
又史記曰魯陽以戈廻落日

又還城楽陵王をあやまんと今日の夢
小撥して日代午にかきくるとしるす
陵王随舞吹嘯云我本胡児吐氣如
畜我抹頂雷踏屋如近右得士力尼得
鞭廻日光西没東西若月舞楽打去
縁之長曲

寿

河海混出取楽諱一禅同じ云と
同云河海に還城楽陵王をあやまんとて
日のくろし小撥して日代午りかき

されとみゆるといつまの書文なや一巻
それ書うしるす楽れ譜あまたの世
多くの手をひかれしあるまや

秘

此君の同じ出所たしかなる流の手とこし
とよみたるもこれも月よまなる御拍子八

先

此巴の撥をおきむかふ所とハ隠月とみ
てしゆのまにあれ上よ雲かくれしかる
月といひて隠月の手とあるに世伝る
心閑なくひまなく両月く出わし伝わり

弄 又あまの羽返

秘 大まれの羽は巴の隠月よ撥ハおさむるゆゑ

なまはらくとなり

河 此巴の撥ハ隠月よおさむるところ也

又李嶠琵琶詩曰半出方絃上

王元長同詩曰於月如可明

呉均詩一前一列作琵琶自譬規心

覚照月

よそにおもひやりしよりはまた

秘 まへにゐの比類の女しくなよゝかなる

かさハきかくやとおもしろうあり

昔物かたりなとに

住吉物語よ姫君の琴ひきさしたまふを

中将ぬすみてきゝける事見えたり

又うつほの物語月のおもしろき夜あて宮八琴

いぬ宮姫宮なとすゝみ給ひてあけて琴とも

ひきあはせあそひたまひしあり

弄 薫の心 うつほの物語にしける女乃

事　そらいて琴ひきしと今わら
声ていふ人と遊りなくかなしくえて
なりし事なとありさ子なるしいて
くらし事　何り

秘

伝りし物語らの物語となりたりお
まみくり

何もあしさりきんとよくて
作物語よ為やりの事とい家とられと
めれくる事なれとよくておまよふさて

いゆるやりの事とらんてけてさもみえき
月そと出る志るらし之

又月きしいてあんと
弁
村雲の完の月の宿りきこえらしめふ
さしいてくりとるもり又くれてさき
めうれ完と見ゆ

秘

むら雲のさ面之さやうにみゆるくてあり
すとさきて又なやうになるおり語り
れとろつきらかにいあります

志ほつき抗術之
京ふ帷幕ゆくまえも
秘 東ておけぬへきとてかくいひ侍り
たりおしくまいり
秘 文の法否ちるといわり弁
此事もうしなしさあて
董の詞也こその当とこしかのかれ
見えてしまつまるまとものめへよめ
給也

まいりてしきこゆ
秘 只今まいりうるやうに仰せらる之
かくえてや志ぬらん
秘 まへみのそれをもて八志り給はうる之
まちれ八侍りしを
ちるの給ひをとこして給へ気とふ姫君ちち
のこるし
ありはるみかのまへり
秘 わはまへきし人もみてされしハ

私まれあけて月見給ふしみすの前
はみすのまへにハなりしたまり
秘 葉のこときゝ之
山乃けちらみ思ひなりつ給
同 右 世よりまさはうさしそまれ仏なりぬ
岩れけたぬしなりしてん
私葉れな給くかまへ山家山路給
姫君さらにかこちなほ之
あしくみかへやしけるなは

同 もちらしや之
女たつれとくわれと
秘 はなみうとりさせ給人とてたく
なりんをたらしいはさ之
なまふまもそりさすぬ
あさ君の御内之事
私人おしわりさ給のわきしあれ
ふりもろしくろまり大きみの
かのくにのまで

かけ志りなりしうさを　弄　薑の図之

秘

薑の図之世間の事と志りなから志らさ
ふかき海代つらきハ世のならひ也されし
ともひとよみかくおもひめさるゝ事をと
いとしとうらみ候之　弄

ありさまりありとおもふ也

秘

八文の御事之それにつけひとつ御身
なる上は何事をかすましくとしなり
おもひ人さま事と之　弄

流れのうら八何事かすましく

花拾

河竹のみや志めのうし風あらはり
心のうちれすましかるらん
私事夜川なれ

さやけしのさいはひもすとむかう人

秘

すれしきさ方の心はかしと之
つまくものそれしゆる世のおもひかりも
恋のこれかしさ海もてもの身な
きはさまし　なれてかおしこゝろの

ねかりうちときこえしやらと
ほまれていつくよくせ
大君の御心
あまし へなくゆしろく
抄
ことへうてことのおほかとなき老人の
かはりて薫の御代ハいとりえすの
内よりそとよりみえるし
さぶらふすぎなりとも
弁
年よりもあまし

いとあやしく
抄
老人の詞
すまひまで人の枝にもあらぬ
此宇治の大君の事を云
ゆるともありぬべく人てふ
近こそは中より見えの事なとを深さん
詠をも渡し
ありくきゝけむしのかと
薫の此文へのこしかれ事し

わかき心ちすも
姉君なるこ
はくミて抛かきさるも
秘 薫乃心之
いと毎川さしもすつに
秘 薫の詞之毎たりしもなりつうき之
かりきぬすきの
薫乃さ夜かり
さしきうはくかやと

秘 老人の詞 薫の詞心ゆくき之
おかるききさるへ人ハ
秘 薫乃心之便りのなきハ老人のうきひ
うれしき其ハかすみてもこうとえる之
秘 おや志りうりのひてとハあまり心ハ
ゆ人おうんと不審の事来さ之
うハかくまいる事ハ
秘 薫の詞之
うとれのて六ウり

詞とのへをとまと

かく流ねてしも侍らし

秘

老人の詞

又侍りも夜のまのかと志らぬ命

何

人命不停過於山水今日雖存明亦

難保何態令心住悪法

涅槃経

雪山鳥唱曰 今日不知死明日不知死

何故造作栖安穏無常身

三条の家に侍し小侍従かくれなり侍よ

寄りしと

秘

女三文乃呼方とおれいひ出を侍

女三文と小侍従ハ女三文乃めのとの女

此老人弁此あまは指手のめのとの女

我女三文此れめのとと指手のあまハ

おもい弁尚も小侍従ともいはこと

とはかうかうせかいらり

秘

いかうかうもらうし

弁

いかうかうりし弁ハ八文よ上残し志もし

き人〳〵し

此は按察大納言と申しなり

抄 紅梅の大臣之

弁 紅梅大臣事し大臣よりはしめぬ事あり

時ならぬ事なし

松葉生まゝ後へ見えし事みれハ

右馬頭殿え申うけたまはりしと云り

いくえしも色そへしらね

時めくよのやうまされり之

手紙やりてかへ〳〵給まとく

秘 あやうき年やりよなりぬまとと之

河 川弁

手をやりてあひみしまゝとかへま〳〵ハ

に紙とひてやり又より

不及 川弁之

按察大納言ハ流あれとも給しハ弁かたく

りしなん給し

花 按察大納言ははちち右馬頭月〳〵比

秘
老人ハ弁舌もいはんや
柳半之弁
流れまひのすゑ川つゝき
柳半の遺言の事は巻のまふあわ
さすれハらいてんかりね
秘
妙なりかゝさ道
あやしく夢なり
秘
かなかれハ
かんなれやりれりのくこハすなり

河
亜 男九二十年 硯 女七十年 文選
弁
神なものつきてあいはゆ似たりとぞ
たなりふかくおもしいはゆ
蓮の柳半れ事とおもふぞ
さしらにすなわ柳なり
河
さしらりよ之屋なてと云也
秘
うらでひまうもい本綱之 弁注にみゆると
あらくしかりく名れハ
掛云ホしく 二年 似れ 又コトしく 二年 似れ

五音通有之

そこいしなくおもふ事之

秘　菫の詞

弁　菫の弁よこて之ま之詞

はまゆふのはらしさふかゝ之き

菊に霧のかゝれとあわ

たしかにはらんしこゝめしれぬ之

は　面目うく之

秘　姉君さらとさらさ随之

おもふ名のかとらりハ

秘　心のまゝうきハかてさうひかれ之

弁　おもりもやくかえ弘之

かのれりしまれちゝの

秘　八丈乃かれりし由に注守

君の八重雲おりひやうへさてたかく

花　白雲の八重にかさうちとちらとても

おりん人ゝみ心色さゝうか

後撰　思ひ居る心りりハさりりしとまし

色そ付らんみねの八重雲
私云 霧の上に色ふかく横雲と
かさなりしうへし 面白し
叱
姫君さられ
紹
薫らし今立かへりてさくらにおり
小しれ袖かをしき隠の跡を消て
色ます心よせは心いかなれと
昌
薫れ色も見ま隠れ声を出すもなく
ゆりましてて姫君いかなれと

おくまり旅人ぬれと
紹
姫君逢れ人やならさ
そとこしゆりとて
姫君色ちられはくもりしれさ残るると
たとしゆりをとて
薫
羽ふりけ家ちもみれぬらし 桂れ御山ハ雲にあてゝ行
紹
おかしの色まれのお山ハ宇治の名残
何
桂尾山宇治 山城国推本これの山道
とおり
其ちらく利なすひ旅人旅

姉君の事をなまめけるなと
まいりのいとほしくまかりまて
秘
大君之
返大君
雲のゐる峯のかけちを秋霧のいとへたつるころにもあるかな
弁
姉君の聞しれ給ふ義也　不出頭
なとあはれなる所の様をあはれなり
霧立人雲にまかへさせる所の様なる心
の中ハとりわけるあるへしと之
何かりありし事

秘
薫の心なり
心ふかしき事たかうたにも
弁
薫心りともかりみえける給みえし義之
けくなるかとにもとまりさはか
一言をもうけ給りてハ猶多き之
私大君と一とせかり彼方の事之
弁の居のかしさる事よハあらん
とみゆ
世の人めいとくもとて御し

秘

薫ハ大かたの世の人めきてしとこそ様な
（これはおもかけてはあらすと）
薫をたゝの世の人めきてしかるへき
と恨たる也
あし流ハ人さはりしをうりさまとひなも
よしぬるや

花

内膳司式云山城國近江國氷魚網代
各一処其氷魚始九月迄十二月卅日貢之
今案近江乃田上のあしろよりもたらさる湖

河海

氷魚を山城宇治まてこ淋といへり
宇治川の網代にはうねは詠とそうた（蔵本の歌）
あしろにてよ人のつきされ君こ

鮅（ヒヲ） 和名 氷魚

後撰よなよな月の波にこそうちよる日のみちよ
ひをつきてとこせて仰りもれたく
宇治山乃紅葉をみすは長月乃
すきゆく日をもしらすそあらまし

秘

これもの人のいふて

何となき世のいとなみとてよ
おしろ半らりみうもいた
頭を見はれなりしこしな
何
たおしゝし之
私おおし事絶へし
氷奥のさみに殺せし半をとらこひて
世浅まろおいうまを利をおうそ
心はさおし事之
毎
ろうれさ事もこ見経て文字たへ

なとにおもひかへしまよ妙せ
我ハらりうに玉のうてすに寺りまた君らよ
へきさ世は
何
於
柱臺　日本紀　仁樓
言よりまハ玉のうてれしおりなり
あやめのくさのいおりのことして
秘
我そ寺りのまさこハ世すれもされも
それをむ極ともむへきうあに
いつまでもおしりの世といひ逭之

判
葦の露みえてかたに値てあのらめに
らうりよもおり人ハおもしきありと
あかさよこさしまよ
葦
橋姫の袖しきて白き世さ川棹の霜に被て始めて
姫君の心え之
河
橋姫ハ宇治橋の神也武庵よ方葉ふも
ちりそやみなもとらをもいそわ
左
さむしろに衣かたしきこよひや
我をまつらん宇治の橋姫

宇治橋姫といふかりけり
宇治橋　孝徳天皇大化二年以門道登
始造也
三本河海之端造之今書如此然し一
宇治橋石上銘曰
浼々横流　其疾如箭　修々征人　停騎成市
欲赴重深　人馬亡命　従古至今　莫知杭葦
世有釈子　名曰道登　出自山尻　恵満之家
大化元年　丙午之歳　搆立此橋　済度人畜

即因微善　変發大願　結因此橋　成果彼岸
法界衆生　普同此願　夢裡空中　導其昔縁
孝徳天皇御宇　自丙午歳到弘安七年甲午 六百三十九ケ年也
大永六七廿五写之 伏見殿御本也 已上三本如此

花
宇治橋ひめハ橋下ノ姫大明神より
神之託文ノ神代姫神よりひめよ
といふ説あり　又一説ニ住吉大明神ノ宇
治ノ橋下ニかよひ給ひて　いはさせ給ふ
よ哀なりしこされ給ふハ住吉大明神ノ御方
といひはべるなり

家
むしろはむしろへハ海のこなひ之我と
久しき宇治のはし姫

弄
橋姫に姫君をよそへてさふらふ人のきはくよ
以下ハかくれ身によそへ侍り

秘
橋姫の事古説いつきまつりし也　此
方ハ姫君をとりし姫によそへて此方
下句ハ思ふ身によそへ侍り
私ニとりてハ心中を案ずる義也

義
女々せはなるさ流之浅くて舟あふしさ
さき歌之の棹もひまあつて袖ともめる人さき
之なる流舟もいふハさなるさ流をこさん
まうよ舟れさこをあさくひつよ给り
こと袖之それハなる流舟もて舟れ名之
なりあまりんと
義
さひしからん事といふ之
さむけよいらてさうおかりして
は
さむきさ時ありくきれるといふ之説鈍
いふハさまなり　よのなかのさかえ之
これもハからおりハとて
秘
疾なり
かやりれとれおそきさハ心をとれまる事之
返歌君
さしかへ浮宇治の浮長翅の宇や袖とくさしまらん
寄
姫君の我身よふせてあり
姫君のよう身乃上を侍尼いひおほ之
今案一二のるハ蓋れなはいひて三乃
句ニト姫君よりうつくしき之

義

さしくかりくか絶之多さしくか

かりまて八大君の孝子雪にとまる之

されハ恵ニさ之くうしろん八大君の跡之

上句八董の事とふて也之

男さ之うれくし

河

されさかの宮下よぬうし袖イ拙也へよ月

けくうれてしおかやゆかの礼

并 秘 義 一月用付可

公之海りぬ達し

大君のさ跡のかちかのはつてさうる之

かなりまうし世給ひかさに

秘 八文くうり給ひけりさ之

又れこの人ふぬさうけ

董のさぬ上下特衣うもし命井人に

給へ承也

老人の拙そうり仏みかうりて

秘 義 并乃居のいひ出す事く

くい太子の我身よこひまんけうりうも

狩ひのひしゆかり此事され侍之
なほしわハこよなくまさりて
秘 姫君さられさ侍之
箋 かれて思ひあかつましに出まう之侍之
なほ思ふよれしまかされ
秘 世なの御しら侍之 弁 一見えし
白き志ししのありぢてし侍よ筆さひ
ほくろひて
箋 梅かえ巻よ白きひめと八剣丁源氏乃

筆子綬かき紙なかしあり又ある
紙よりも白さハ墨つきさうなまようり
あいきえゆ人こ事し
うつさうかさ侍よやせ
秘 文の洞うえし 弁
箋 宇治まて姫君さうありしめて対面の
事こされハなうふ事もうらつひなる
ゆ人まりおしうなと之
あひうこそ失ゆりて

秘
くりくり庵ゟ札をとめ給ふと
かくもしさゝせしはうやうよ
箋
かすかれ為手のまへとあちさ波よ乃
後取り申之
北山に入りて給ふん
八宮の北おこなひ満する時の月也
ましまれ
箋
風流めかし也
左近のそうしする人
秘
左近将監也

かの老人の行く
弁の尼
又の日かれ北ゆるも
阿闍梨のもとに八宮おくりまいらせし
さてたりしまいらせおとのよせまいらせへかんと
箋
八宮の山におくりまいらせし事 布施物の
秘
匂と薫のなからひ也
此七日の念仏ノ間ノ布施なりと
これら人かの札ぬきさすての

薫物ぬきさすへし衣嚢之
かりの物なりとも
は 将衣之　短嚢（かりきぬ）　四季なれ
身れをさえゑぬ
義　よれ衣嚢ょてしかくちハかりし此体
似あまぬ之
何まりせて身を危すくしかりまいまれ
秘　杜子美（子家廿二）か詩ょ錦鯨巻テ還（カヘス）客ニ始テ覚嚢
和平（たいら）しいつ物執之

君ハ姚君の物さる事
秘　君とは薫之字治られ返事之
義　姚君ハ大君之
こめしこき紙
弁　こまてハ巨なる体之大やすなる義
秘　巨の字之かあくる体之
交みもかくゆせらしそこ
秘　八文へもはりしとふし給へり
何かハけさうまちてもそてなれ給りんも

秘

八文の詞之葉よハゆかし語へ家之
秘何かハ口ト切てよも文之されと
なかりけんなしかせと

秘

名やりふおもむけ語ひしとて
似そとあるらん

義

八文のふかよかりんなしかも一しかの
語ひし夜よりそう語人よみかめ
言葉さりさらてハあらしとて
流るゝ川のしさ波くれ流らすひ

秘

八文より葉への返事しよろひ語事
八文之結綿ちまとそてまうりうらと
みくよりこひ語人ふそのれとま
さんとて葉れまりて語ちらし
山乃いろやよあまりし
寺の事とおりし語くまり再語れた
せくしかりしとて

秘

三文乃名やりにおくまりさらん
白文之加やりのかくろへうる事かんあり

これの御つくましき御事之案し匂
宮宇治よりかへりひめ君之事紅梅の巻にも
もされ乃事也
きさてうきまりして
箏 此紙と海のやうよいひきさんと
乃ころの文箋に
秘 匂宮之まいり給へりと
哥 薫の匂宮へまいり給ふれり匂宮中宇
治の姫君の事と中君の上乃巻にも

宇治へしかもひめ君とあはしうりも
されの事
それおろされ
うちまて薫のかいまみし事
文いはせられ
匂宮乃案内しく御の心のと御ありさま之
されはよし此事しき我みて
薫の心之
ゆてそのみきんかへり事

筆 宇治よりの返事之句文の詞

さりとは海く

秘 薫の詞

筆 匂我かしハ見せんとの返しとさせる詞

かのものハ

宇治の事也

秘 いともむすれしら身よひさこあて

我身ひとつよひさこあてハなきまし

ここまで之

いとしらぬ様りせ

秘 かくしくいかにてかなひぬへき 薫詞

ト之 筆

かやすれおとてすゝめしくハ

弁 匂宮ハ名やすきぬ中の君をしと之 秘 筆

はるゝと見あおりめへき女乃

秘 趣して世上の事とそり 弁 筆

筆 地おもりしき女とハ身の上をかろき

ありて山さとめれかくろへうかさり

乃やうな所にかくろへてありつゝき
女ともの身のありさまあはれ
とのみ思へくなり
箋 前よりかくろへはるかなるも
いひし異説也
古乃ここにて事也
箋 宇治の事也
秘 八月のひかりもあまりなきと人かな
乃事也 八月十五夜かくれなく事也

少有人知之
かの物かはし月夜の時の事
箋 前よりの事をいひし時の事
さなりならんとそれをおもしろきこと
補 かやうの事をしてもおもしろきことはせ
いと思ふあるかの人にも心見せてき
秘 白氏の御集之義を見入八月十五夜
ゆゑしくと思はせ 箋
れいのくまなき見えしと人とをとめ

箋 白宮の薫への詞也

秘 薫をまちあはさるゝ也

秘 よそけ給 いとゝうしきこえまて

箋 大庭りまよからしき也

箋 抱れをよひなきやうれ也

おかしくて

秘 薫の詞

私 薫の心

いてやうしなく侍り

箋 薫の詞也 白実のみかしきさ見給へ

なをすゝあるまゝはさていやく我

ハ世よ心をめしとむへらぬ事

たゝ遣心乃のまりそれハ本懐なる

うえしと也

いておかしく

秘 白宮ノ詞 箋

ひしまさらば

け 聖人詞也

秘
聖初之
しのゝめのわかれ
箋 薫の朝臣之弁君の事を何之 実父
の事をこそあはれめくらしけりそ之
うちとゝろかされて
又弁の君よりよそされては此の様は
しほかり給之
あはれとそこれは曲説也せあと
箋 是は網代の時分そと其人の申之

なにことのひとしにおもひそしまて
秘 蜻蛉といへり朝おきても夕をまたぬ
かたそまし之 箋
弁 蜻蛉とかく異よりそく云へり
河 蜻蛉(ヒシムシ フユウ) 無常の喩よいへり 蜉(フユウ)
朝生暮死 出説之
西円法師ハ晴て氷奥とやらん常に
なりに似ねさる無念の事也 蜻蛉は
朝に生て夕をまたぬと無常の喩也

花 郭璞詩
借問蜉蝣ノ
輩寧知
亀鶴年

此氷も氷魚の名よりてひをといふ紙
はひをれハそれを魚の事ならて氷魚
ゆりまてハ何れ魚ハなきこそ大かたよき物
読とししらみてハことりおもひ定て
こきまれたかりへし

花
郭璞詩　借問蜉蝣輩寧知鶴年
あはれみてもらんとそれすて語ひく
前の紹にわかしてその事ものあやまて
ときくあまりも何りり候まてさまり

さりきりと此よ合てみるへし
あはれ車まて

秘
昔ハ女うまのりし事し車之
かかりれな綿しさしぬきけり

花
昔ハ出るも直衣よ平絹をかたもちの

河
縄直衣指貫 コトカワ二十九 しさうひのひハ宇す
め字之　故着之

義
人みまれきんとてこき語へ分し

新
同云昔とぶるを思すし花鳥餘情よ

おそハされし大方いろふかき人ハいやみ時
若けれハやはり橋姫巻にてハ薫ハ
とあり十月九日之一答かをりハ年猶少
匂上人若くし又六君老たる夜丸衣
ノ時着て又服者なとし若く
宮まちとものこひ給ひて　秘 八宮也
取りつけたる　三十一歳合之
わきまへられ
甚深ノ義也　須弥頂義也

あまりもゆかしなからして
阿闍梨　請下
尊きいませよ　秘 義理也　義 浅きよし
うちわたしたかれ
かやうの法文なとききて来てすみい
林須の次ノ詞は風のほとおもき
とは耳につきておもしろくけり
おかしきの也

秘
箏
姫君の御事を思ひ出る
此筝を弾み姫君さらの箏は色ゝ時
乃事
こひの為のわかれなるきみの法めて
新
八雲の琴の上手なりし此人よまれ
その事を薫の君の思ひ出しに
きみのこひ寄にあまてみまれ給し
秘
薫の詞
色をも香をもしらすてしは

河奥入
君ならて誰にか見せん梅乃花
色をも香をも知る人そしる
箏
不復明方八雲調万事世間の事を拋
て深りそのまゝ調之
秘
八雲ノ調之
いとはさうてなりけりや
八雲調
知る人なる梅の好みつけて
秘
知る人しるに思ひ出事ものゝこと

箋
薫のなみてしひき給ひしそれよりさき
てハ器も出すへきことゝ
ひきあはしてまいらせし
箋
比巴を薫より取寄し給ふ比巴ハ絃の
中にて音楽をとする故也
とりて来へまし
弄
薫の君へ参るまし
さうにかゝれにまて給ひし
秘
薫の詞也一日こゝにて見しまゝにおほし
音ハ思ふかしきひとよりにひき也て
見給ふハさもあれとて弾しこ給ね
さ給之
箋
秘に同し
弄
姫君たちの調琵琶のことゝられね
おしてすゝれありきことし
流こゝのひとききうしまや
弄
ひよあ人やりて又き之薫早
下の詞也

いてあおきられや

秘

八文の題

さかしくはまてや給ひける兄きさかりにも恥

あまへこそ筆まてはなしとの八文の題

札とさりしるやとらへは毛氈よりあ六

あまりある筆うれは口さりれく

のあよ座しありとらへすあや給まうへ

くらめくも以よ八文早卜し給綱

のあや

こそんきさなしし

琴は八文のひきさまゝ

かさへはみよの松風の

題

松風入夜琴といふし斎宮女御

拾

ことのねに峯の松風かよふらし

いつれのをよりしらへそめけん

夏

後撰夏の夜深養父か琴ひくをきゝて

中納言兼輔

みしか夜の更行まゝに高砂の峯の

松風吹くことをいふ也

養 川為 ことのねよみ人の松風し

松風也へは一入の感しあるなるへしと也

あのあたりに松うくかのめくさうれしと

秘 八文字の詞之中若の形作との説ゟり 養

弄 八文字張姫君ならの調の事との説也

心しうれにやさハよくひきえうるを

ここけしもありと也 養

知ぬ海りせてかのしかさなうれ恩ろめ治ハ

養 合奏の事りなれ事代のめて也

ろあり拍れよりよすりりぬなりしあるも

河 無論之 勿論之

秘 用ふる之

弄 用まろうりハありしと之

養 たりしハ拍子之

かさなりし弦へとあるさよさるし弦へと

姫君ならの箏の法色うちとしハ八文字あるあめ

弦へとひきし弦りあると之

いとゆかしうれ旧冲

筆 薫の君一日の暁に給ひしをさみ

ありしく覚えてさいはまうしも

ひき給ひぬ之

うれ侍りてふりかくあやしう侍りぬ

秘 此紫式部達をかきてとれる事は

薫の君をかりしきことし

弁 八文乃君紫式部こらしもりぬあり

さ海を人の世に盛りんことし

人ゆきよいふめしうせしと

まれなやきさめ給ひ人事ハ御涙は

及びれ人にまいらせしをせしとてかくて人々

くみ給へともまうし世にけられ

給ひん時にハありしとなりぬべき紙な

紅葉をも紙人
紫式部達之

けきなま

心ならう見へさてまかり給

弁 薫の君 筆

まゐりもの流うし給へくあら

秘
蓬乃組之　等閑ならましき事
私蓬ハ古書あるとし以前ハなきハ
あつての法をとすれは渋しれし
もとりハ本閑あらしとこ之
いとう流しき事しと
秘
八宮ノ御事之
宇乃ハおこなひしのまおもよ
八宮後東のおこなひれ
老人(ひと)めしいそくあひ給つり

筝
弁君之
ひめ君の御らし給ひまて
秘
さてまて弁の君の伝記之推奨に
系図とよくみまり
按察大納言の君乃
紅梅乃事之
よしつりに
弁
東の事よ月ころもあるそ
竟ハ世ともとりの心なるへし

一 動世にも来ぬと見えさる
なく事かきり給し
弁の君ノ称事之
きよらなれ人のうへとききたるよ
秘 薫の心 義
涙とゝめかたきりなれ
是まても薫の心之
さてもかくその世れ心ありける人もありけり
語りける事を

義 薫乃詞之柏木此事を弁君よく知り
たる事をと云之
然てこれをしらしらもおほかゆるとの
薫のさあれハ人のあまりきこえんハ雪月
なれ事とし之
秘 糺くいひはなち給
薫弁君よ向ての詞之 又志る人あるら
ありし之
義 弁の君れ弁よ 又世にいひはなち給へ

あるハ女三の宮なともわか身のなと心
ふかしされハかく薫のことゝひなと
小侍従と弁とかたらひて
秘 弁の君の詞
箋 小侍従と弁ハいとこ女三の宮柏木衛門
のとことなりし
かのゆかりのことさそてまつりて
秘 柏木のうけく弁
さしおかりの中よ

箋 小侍従と弁とゝ
かたりいさはしはくりしうも
箋 薫へ柏木の事をあかしはしめたる
いゑハのからめになり給く
箋 柏木の病重の時分也
こまかしめしつてつけりと
箋 薫のきこしめし給ふ家厚きに鏡女
とひ念せしきにしてとくゝかる中
世は仏の利生もなき世なりといふなり

はらんせされへき物紙と仰り
義　文とりの事し
いかハ何ゟはやきもすて給ふん
義　まつ方よとときて落ちなりしてハ
と思しかとに焼ととさんと思ひ
なりされとかく薫之おひそまれハ
それへつくゆさんかとに焼りすて
しと
ちりいでまりできてあん

弁　力出来之
さくにこれハ此世の事あも
先ハ前世の宿縁なるよしと
むまれ給ひきるかとの
薫誕生の時の事し
むかしうなりおしさりれよ
秘　柏木の事し
母ふ仰しへそ凮ってやまひつきて
弁乃母之柏木のめのとし

いとよ浪しはみ

弁君か哥なり

からころも身ちかさね

秘 柏木の夜衣よわか母柏木の父のとれ

服をとゝさめうとこ之

花 弁の君柏木の服と母の服と紙

かう事ゝとゝし

何 纕衣 テコロモ 衰衣 和名

扇 ひとへのまさはハのひしこからころも

日 かさゝる秋をおもひ屋かえ 書て

からころもたもとはたかひぬやは

乞ハりゝもそ尾すまさりきり

捨 おの玉のうれしちにさてはし

こゝろの山の山さむし 風もさうぬ

からころも 書さしひさし 朝露に

弁かしよねる人の紙つけさりきいかゝ

弁とつまとせし人おわさむ之大弐紫

なりとよむてりきらすや 蜂花 弁君か

今はなかれく筑紫人になりし事と云
人といりこちて　河 訓バカリコト
花 ちはハ女なかれなる事也
うれへをかしこまて
秘 弁の吏の事也
西面へむしてなりきたる人也
古乃文ハちらとさふつけて
秘 姉君と執之
冷泉院乃女御との

秘 致仕大臣女　弁 梅壺ハいもうと也
箋 梅壺妹弘徽殿と云
そしさうて
箋 上きはにそれしくしさき事あはれ也
見山のくれのくちおしみ
河 右 さこちらも見ん山のくれのくちおしけれ
何は花よなさくるなん 薫蔵〔侍〕
箋 網のかりし 不及引 弁 別の心
されにめてひ侍るまて

弁ヶ身上の事也
まいりあ事をそてぬ
秘　有まし物ありまて来もあけぬさらく
まいのとはいそり
よりけりハさのむかし物ありハ
秘　薫の詞之　弁
奪　薫の返答之
絵提とりひし人を
小絵提の事之　薫のあいハ感附せぬ事之

はしあるさ身まで
奪　実父を芳ぬハ罪障なりの人（事之）
けやふをしまれあらせうちむどりの
うびらさこさ代
けり　細し許サヽ事　遊仙窟なそくまれうら
然れおぼ文古之
秘　けやたし　弁　一動（さの字）　清濁なり
衣　ゑひくされハうひてあらされと云
おまへかてしうしあらせ給へ

秘
葉のゆゑ之風さすて須之と云之弄義
よしなさいて風てもあれ成けり
秘
柏木緣流ゐくの語ひしと之弄義
流之事ハせんと
小侍従ハ女三宮ホさぶらひハそれ七葉
事ハせんとおもしと之
風そて此の流行おしも
秘
西山まて弓りし事ハ私ノ悲之
私ハ私ノ悲之と秘ミの世ゝれる臣ね

かうし
まさらし事ほはあらすれしらあん
義
小侍従よまれし事なれしみた
まさらし事いらよハあらすはかミの
流てるともなりし哉ま一入のかミ之
私は義らくさこていら秘の義あや
まれり
つまろうて云まハらくい語なり
はよとハ葉のそうてとれおよし義

くれしもちつきぬよし哉
箋 弁君純言せぬよしを返していひをさ
されしそとおもひけりも拙筆乃
ためみられぬよし
これかゆこそいひなまし
八文のうちよみこし
けりハいとあはびなりし
何 臘月 十二
箋 臘（十二月）文しいふあをときこし臘事となれ

臘（十二）日も名月（ミヤウモリ）之
月れはおいそこもあさぬらん
秘 八文へ下さうし之
弁 けしし こあつ日ハ太ここ冷泉院
所へも出れむきるとかきてはしめ之
院の女一宮なやしのよれとみひよ
秘 冷泉院の女宮之
弁 冷泉院れ女文事 母殿仕太氏女弘徽
殿と号す

かきくし立よらせ給ふ
箋 八文ノ詞きくハ細ノ足数ノ字也
秘 八文挽歌し給ふ也
かれよせんましきとめひて
河 唐浮線綾
箋 禁色ノ色ノ亀甲ノ文也
上(じやう)とよりしと
かみえさせ給ける也へし
かのれなれすりつさなり

弄 指本は封しうる也 箋
秘 指本乃判形ある也
秘 彼御名は封之判形ハ花押のときは紙
くはしう据也
はかなの名の事いはしむ川
秘 女三宮乃はかみ也 箋 女三宮のは返事也
さてハかれはまて
秘 遺言之女三宮へ書る人(こき)据之
箋 指本のまなり

尾花ハおりくかきりにつかりふさはみ
義
みれ観しとる之　義
弁
柳本れ文の観之けよ女之文れれこ之や
ふるへこさゐさしろう綫いまさしえなまて
弁うかさみありし之
ゆらしくなり事ハそひみかり
弁
柳本今ハのかとふれハ女三文とゆく
之よ似そひさうる之
秘
對面ともう紀事ともと之陳紀られ之

にかさらもかりりて
秘
女三文房ふなり総之歌之　義弁
あやしき鳥のあとのやうにかく
此
蒼頡見鳥跡とし初て文字を作り之
義
是ハこその理にしも見るとれと云り
柳本
め風よふ世成そむく者かりもまなくる我れ
しきさ
花
右
都よとうにこそてうるし玉わりも
うれ本よ行ん者うかあしき
秘
ゆきぬとふ人まよ之古今都ふとと子ふさて

養
わかくし　此句之
女三宮の御こちたちの事ハおぼつかなき
行き事之されとも柏木ハや死の
道にたちむかへハわれまされ給し之
不成へし
次つしくたしまよ給　二葉
秘
薫の事之養
花
二葉ハ松ハたさるき人よことこれ
かおる大将の事之

うし海めくりさりまゝなるさハなきれと
秘
源の御子とて人しとかれハおよ
ましきと之
源氏の御子にハ方られしハ薫の御すこし
うしろめたくハなきれと命さけ
てみれぬるん事と歌ハ給也之
柏木
命あらハそれとも見まし人しれす岩ねにとめし松の生末
養
命あれハよそなからそれとも見まし
と之

川舟

峰しあまたハ岩ありて松ハまれなり

しみとい虫のすむよなりて

河

蟫 蠹魚曰 又白魚 和名 食書虫名 衣魚曰 紙魚曰

遠蠹蠹落書棚 韓文 杜陵詩積蠹鄭

獄劔生苔 白氏文集

花

白氏文集十四紅箋白紙両三束半ハ是君

詩半ハ是書経年不展縁身病今日

松

開看生蠹魚

いさつよらうとくみし月色く

あしまは志くぬすしうそてなる

と定家卿のなゆとはむるへし

あきは玉しれぬていまかきさらんふとも

河

かきつうるあとはふをせもぬ

もれきすまようやなるらん

松

川舟日

いとたしきう事ともても之

箋

薫氏仏女三宮柏木の事とみえ

うらみられんとえてはつもいてられず

義
花み来由ある人ニよりおもひ之されとも
はやくを見ん為ひて抛たなりしさころなれ
あら哉よ出さたまぬ之
文乃呼人ニ由つわ給へまは
秘
女三乃宮之葬
何かハ志りみまりとも
義
女三宮之降嫁を志りさ給とハ志らせ
たまはしきとの薫乃御之
よりふたりひの為へ行

薫乃なるやうやとあれたもりしく
おもひつけある御之